

トウキョウサンショウウオの幼生の飼育観察記録

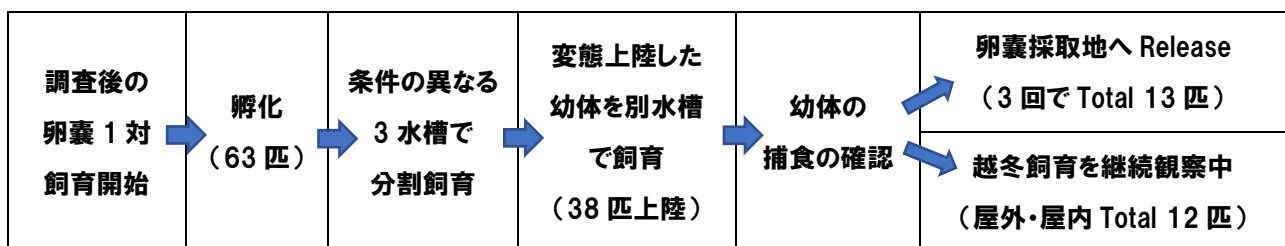
高山裕子

近年トウキョウサンショウウオの生息環境は危機的状況にあると言われている。丘陵地の谷間に存在する水田や水田跡地、また谷間周辺の沢や湧水による湿地や池など、現在里山と総称されることの多い昔ながらの環境は首都圏近郊において急速に失われつつ有り、一見緑地として保存されているように見える場所でもコンクリートなどの影響による水環境の変化や耕作放棄などによる乾燥化の進行でトウキョウサンショウウオの生息に適した条件が失われているケースが多いと言われ、ますますの生息数減少が心配される。

3年ほど前から八王子市川口において「川口の自然を守る会」の調査や整備を手伝わせて頂いており、トウキョウサンショウウオについて知るようになった年数もその期間に一致する初心者であるが、資料やシンポジウムで見聞した産卵調査結果や個体群の推移のデータは非常に深刻であると感じた。

野生生物において、生息数が減少の一途を辿っている場合に絶滅を食い止める方策としては生息環境の保護・整備がもちろん重要であるが、同時に個体数増加への助力として卵から一定期間保護飼育する事も有効ではないかと考えた。

しかしながら、トウキョウサンショウウオの産卵場において卵嚢を保護し、孵化後に幼生を放流する活動は既に試みられており、経年後も目立った個体数の回復は見られないとの事であった。過去のデータによると孵化後の幼生は一定以上のサイズに達するとイモリによる被捕食率が激減するとあり、さらに上陸変態後の年生存率は70%にもなるという報告がある。そこで卵嚢を保護・飼育し上陸変態後に自然に帰す事を目標として、今回、「川口の自然を守る会」の五味元氏と共に産卵調査後の卵嚢の一部を持ち帰り飼育を試みた。概要は以下の通りである。



詳細な飼育日誌についてはトウキョウサンショウウオ研究会の website の資料欄に掲載して頂いている為、今回の発表では結果のダイジェストや今後への課題について述べたい。